

持続可能な観光地域経営のための関係人口創出に向けた活動

——地域資源を活用したアウトドア観光企画の可能性——

井上 丹

要旨

本研究では、持続的な地域経営を目指して、観光による交流人口拡大から関係人口創出までを目的とした活動を実践する。前回の調査で地域資源の組み合わせによる交流人口拡大の可能性が見えたことから、本稿はアウトドアを中心として、キャンプ場とスキー場に行き地域資源を体験して観光企画を構築、前回と同様にターゲットとする大学生へ意識調査を行った。キャンプ場の活用については更なる調査が必要となったが、スキー場の活用については、冬季時期におけるスキー場を中心としたアクティビティと地域の食等を組み合わせた企画によって交流人口を増やせる可能性が見られた。

キーワード：持続可能，観光，地域経営，アウトドア

1. はじめに

本研究では、持続的な地域経営を目指して、観光振興による交流人口拡大から関係人口創出までを目的とした事業の構築を検討する。複数年にわたる研究を計画しており、前回の研究ではターゲットを大学生とし、観光地において学生が自ら地域資源を体験して観光企画を構築。完成した企画を編集し、他大学生へ参加意識を調査した結果、その地域へ再度訪問したいという回答が多く交流人口を増やせることがわかった。また、地域資源を組み合わせることで地域に長時間滞在することは関係人口創出だけでなく、新たな観光振興につながる可能性が見えた。

2020年は新型コロナウイルス感染症の影響により観光を取り巻く環境が大きく変わった。有名観光地から混雑しない場所への注目や、マイクロツーリズムと言われるような地域内観光の需要が高まっている(*1)。この変化に

対応して、自宅から1,2時間程の距離で、安心、安全に過ごしながら地域の魅力を深く知ることができるような観光企画が望まれると考えられ、さらに何度も地域を訪れることで地域とのつながりが構築できれば、関係人口創出と持続可能な観光地域経営につながっていくと考えられる。

そこで今回は、密になりにくい野外での活動を中心としたアウトドアについて、観光を目的とした交流人口拡大の可能性を探るため、キャンプ場とスキー場に行き地域資源を体験して観光企画を構築、前回と同様にターゲットとする大学生へ参加意識を調査した結果を報告する。

2. キャンプ場について調査

(1) 調査方法

マイクロツーリズムの定義に従って、大学から自動車ですぐ2時間以内の範囲にあるキャン

プ場を対象とした。宿泊せずに日帰りでの利用、飲食だけでなくアクティビティ等を体験して一日過ごすという想定で、実際に現地に行き施設設備や利用料金等の調査と、観光できるような地域資源があるかを調べて、大学生が行きたいと思えるような観光企画について考えた。

(2) 既存調査

2019 年に八戸学院大学の学生 277 名に対して、アウトドアに関する意識調査を実施したところ、キャンプやバーベキューへの興味関心があると回答したのは 63.9%であり、そのうち実施したのは 55.9%であった。興味関心を持っていても実施できなかった人が約半数近くいることから新規顧客(交流人口)の可能性はあると言える。また、日帰り一人で一人あたりが使用する金額(食材・施設利用料・その他全て)はいくらが適当だと思いか聞いたところ、5000 円未満と回答したのが 87.0%となった。5000 円以内の企画であれば参加する可能性が高くなるという仮説が言える。

(3) 現地調査結果

調査したキャンプ場は八戸市 A キャンプ場、おいらせ町 B キャンプ場、三沢市 C キャンプ場、新郷村 D キャンプ場、十和田市 E キャンプ場の 5 カ所であり、八戸学院大学からの距離と自動車での移動時間、施設利用料の一覧を表 1 に示す。各場所の調査結果は次の通り

まとめた。

① 八戸市 A キャンプ場

大学から最も近いキャンプ場で海に面しており、海岸は観光地としても有名であるため日常から訪れる学生は多い。海岸の一角にキャンプ場があるため、周辺の観光施設や飲食店が利用できる。海岸線に沿って歩くガイドツアーやトレッキング、シーカヤック等アクティビティが用意されているが、2,000 円以上するものが多く気軽な利用というのは難しい。最近ではグランピングも実施されているが高額なため学生には敷居が高い。

② おいらせ町 B キャンプ場

広い敷地の観光牧場内にありレストランや売店、バーベキュー施設、パークゴルフ、手作り体験、動物とのふれあい、散策等多くのことが体験できる。近隣地域出身の学生は、小中学校での遠足で訪れたことがあるため身近な場所という認識であった。パークゴルフや動物への餌やり等ほとんどのアクティビティは 1,000 円以下で体験でき、バーベキュー施設を利用するセットなら 3,000 円以下で食事もできる。

③ 三沢市 C キャンプ場

小川原湖畔にあり、周辺に観光センターや温泉浴場、運動施設があるが、アクティビティ等の体験プログラムは確認できなかった。

④ 新郷村 D キャンプ場

道の駅に併設されており、食堂やバーベキュー施設に加え、地場産品直売センターがあ

表 1 調査したキャンプ場の位置と施設利用料

場所	大学からの距離 (km)	移動時間 (自動車)	施設利用料
八戸市 A キャンプ場	4.6	7 分	1,000 円～
おいらせ町 B キャンプ場	28.6	45 分	800 円～
三沢市 C キャンプ場	40.6	59 分	1,100 円～
新郷村 D キャンプ場	55.3	1 時間 15 分	600 円～
十和田市 E キャンプ場	85.5	2 時間	410 円～

参照：距離と時間は Google マップ(*2)、施設利用料は現地情報をもとに作成

るため食を楽しむ施設が充実している。また、自然滞在型観光レクリエーション施設としてグラウンドゴルフや運動広場、ふれあい牧場等各種体験が1,000円以下で利用できる。

⑤ 十和田市 E キャンプ場

十和田湖畔にあるキャンプ場で周辺には乙女の像のある休屋地区や奥入瀬溪流などの観光スポットが多くあるが自動車での移動が必要であり、キャンプ場周辺に飲食店や買い物施設はほとんどない。カヌーやランブリングといったアクティビティがあるが、7,000円以上と学生にとっては高額である。県内住民向けというよりは県外からの観光客向けのサービスが中心という印象であった。

(4) 観光企画と考察

5ヶ所のキャンプ場を調査し、その場で一日過ごすことができそうだと考えられるのは、安価で多様なアクティビティがあり飲食施設が充実しているおいらせ町 B キャンプ場と新郷村 D キャンプ場が考えられる。調査に参加した学生からは、インターネットで調べるより現地の様子を直接見た方が行きたい、体験してみたいと感じられると言っていた。交流人口拡大のためには、飲食とアクティビティを組み合わせたり、魅力的な広報展開を考えたりする必要があり、観光企画を考えるためには追加調査が必要となった。しかし、この時すでに11月下旬となりキャンプ場は閉鎖したため、今後の計画としてキャンプ場が開く時期に改めて現地調査を行い、観光企画を構築し対象者へ意識調査を実施する。

3. スキー場について調査

(1) 調査方法

キャンプ場調査と同様に、大学から自動車です2時間以内の範囲にあるスキー場について、日帰りでスキーまたはスノーボードを行うという前提で、それぞれ初級者、中級者、上級者に分かれて調査した。また、飲食や他のアクティビティ等を体験して一日過ごすという想定で、実際に現地に行き施設設備や利用料金等の調査と、観光できるような地域資源があるかを調べて、大学生が行きたいと思えるような観光企画について考えた。

(2) 現地調査

調査したスキー場は、七戸町 F スキー場、十和田市 G スキー場、野辺地町 H スキー場の3ヶ所であり、それぞれ大学からの距離と自動車での移動時間、施設利用料としてリフト料金の一覧を表2に示す。各場所の調査結果は次の通りまとめた。

① 七戸町 F スキー場

スキー場はリフト1本と小規模だが、コースは4本あり初級者から中級者は十分に楽しめる。初級者コースは傾斜が緩く良い練習になるし、小さなジャンプ台があり若い人でも楽しめる。用具レンタルは一式4,000円からでリフト券も2時間券1,000円からと安価である。スキー場内に食堂が3軒あるうえ、スキー場から自動車です15分程度の場所にある中心街には多様な飲食店があるため、食事には困らない。また、七戸町内には大規模な道の駅と新幹線の駅が隣接してあるため土産品などの

表2 調査したスキー場の位置と施設利用料

場所	大学からの距離 (km)	移動時間 (自動車)	リフト料金
七戸町 F スキー場	60.5	1時間20分	1日2,200円
十和田市 G スキー場	63.6	1時間25分	1日2,720円
野辺地町 H スキー場	72.5	1時間35分	8時間3,100円

参照：距離と時間はGoogleマップ(*2)、施設利用料は現地情報をもとに作成

買い物がしやすい。

② 十和田市 G スキー場

周辺には奥入瀬溪流や十和田湖といった有名な観光スポットがあり、温泉街の一角にあるスキー場でリフトは 2 本、コースは 3 本あるが初級者には少し難関である。中級から上級者には物足りなく感じるが、景色が素晴らしい山頂には行く価値がある。用具レンタルは一式 5,000 円から、リフト券は 4 時間券 1,570 円からある。スキー場内の食堂はリフトに乗らないといけない場所にあり、近くの飲食店は冬季休業が多く、温泉街の宿泊施設を利用する必要がある。

③ 野辺地町 H スキー場

温泉地にあるスキー場でリフトは 3 本、コースは 5 本あり、幅広い層が楽しめる。山頂からは陸奥湾が眺めて、スキー場から自動車で 2 分の所に観光ホテルがある。用具レンタルは一式 5,000 円から、リフト券は 4 時間券 2,100 円からで学生にはやや高い。スキー場のロッジには広い食堂があり大人数でも席に困ることはない。スキー場から自動車で 15 分程度の場所に中心街があり、鉄道の駅や多様な飲食店がある。他に冬季に観光できる場所は少ない印象だった。

(3) 観光企画の構築

現地調査より、日帰り 5,000 円の予算で一つの地域において長い時間滞在できる場所として七戸町を対象に観光企画を構築した。その際、用具レンタルを考慮すると予算を超えてしまうため、用具を持っている人はスキーまたはスノーボードを行うとして、用具を持っていない人やスキーまたはスノーボードをやらない、できないという人向けのスノーアクティビティも考えた。それ以外にも町の観光資源を活用し(*3)、ターゲットである大学生が行きたいと思えるような構成を考えた結果、図 1 のような内容にまとめた。



図 1 七戸町を想定した観光企画案

(4) 意識調査

構築した観光企画について八戸学院大学の学生 142 名に意識調査を実施した。この企画に「参加したい」と回答したのは 75.4%であり、59.2%はスキーまたはスノーボードを実施するという回答だったが、できない人向けのアクティビティまたはどちらも参加したいという回答も 31.7%あり、一定層の支持を得たことがわかった。冬のアウトドア（野外活動）については「楽しそう」という回答が 95.0%となり、この企画を見て地域における冬の楽しみ方について「意識が変わった」という回答が 62.9%あったことから、アウトドア企画による交流人口拡大の可能性が明らかになった。

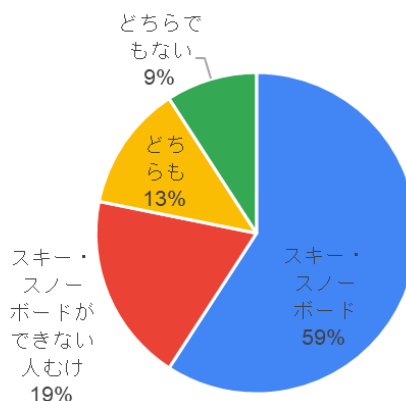


図 2 参加したいアウトドア企画回答結果

また、食事については88.0%が「魅力的、美味しそう」という回答で、買物・土産については74.0%が「魅力的、良さそう」という回答となったことから、アウトドアだけでなく他の地域資源を活用して長い時間滞在できる可能性があるといえる。

料金については「コストパフォーマンス最高」と「納得して払える金額」を合わせると67.6%だったが、少し高いという回答が20.4%だった。理由として自由記述欄より、往復の交通費や用具レンタルまでを考えると5,000円を超えてしまうことがあげられており、学生割引等の対応が望まれる。

4. 考察

スノーアクティビティについては、年代が上がるにつれ参加率が上がる「ゴルフ」等とは違い、年代が上がると新規エントリー者はほとんどいない。スキーエリア活性化のためのマーケット調査結果によると「19歳（大学1年生の冬が多い）に友人同士でスノーボードデビューするかが、その後のスキー場レポートの分かれ目になることがわかっている（*4）。また、19歳に集中して複数回行き上達することによって、満足度が向上することと翌年のリピート率が向上することもわかっている。

今回の調査によって身近な地域内にスキー場があり楽しめそうだと知ったことで、実際に行くことにつながれば、長期的にスキー場を訪れる観光客となり、さらにスキースクールに通ったり大会やイベントに参加したりするようになれば、スキー場にとって、その地域にとっての関係人口となっていくことが考えられる。

5. おわりに

本研究では、地域の持続可能な発展を目指し、県内や近隣の若者層を中心とした関係人口創出のためにターゲットを大学生と設定し、まずは交流人口を拡大させるべく、自然とい

う地域資源を活用したアウトドアについて観光企画を構築した。特に雪国で活動に限られる冬季時期においても、スキー場を中心としたアクティビティと地域の食等を組み合わせた企画によって交流人口を増やせる可能性が見られた。

今後については、実際に企画に参加したときの結果から、頻繁に訪問するようになるかを検証し、関係人口創出につなげて行くために実証実験を続けていく。

謝辞

本研究は、令和2年度青森学術文化振興財団の助成を受けたものである。

参考文献

- (*1)株式会社星野リゾート、「マイクロツーリズム」,
<https://www.hoshinoresorts.com/sp/microtourism/>, (参照 2021-02-19)
- (*2)Google マップ,
<https://www.google.com/maps/>,
(参照 2021-02-19)
- (*3)七戸町観光物産推進協議会,「たびくら」,
<https://www.shichinohe-kankou.jp/>,
(参照 2021-01-08)
- (*4)2015,国土交通省観光庁,スノーリゾート地域の活性化に向けた検討会第4回中間報告,
<https://www.mlit.go.jp/common/001257874.pdf>, (参照 2021-02-19)

執筆者紹介（所属）

井上 丹 八戸学院大学 地域経営学科 講師